

# 害虫ハンドブック

— 果樹篇 —



# 目次

## 害虫 りんご

|                   |    |
|-------------------|----|
| モモシンクイガ           | 4  |
| ナシヒメシンクイ          | 5  |
| リンゴコカクモンハマキ       | 6  |
| キンモンホソガ           | 7  |
| ミダレカクモンハマキ        | 8  |
| ギンモンハモグリガ         | 9  |
| ケムシ類              | 10 |
| マイマイガ、アメリカシロヒトリ   |    |
| ヒメシロモンドクガ、リンゴケンモン |    |
| ヨモギエダシャク          | 11 |
| ユキヤナギアブラムシ        | 12 |
| リンゴコブアブラムシ        | 13 |
| リンゴワタムシ           | 14 |
| リンゴハダニ            | 15 |

## 害虫 なし

|            |    |
|------------|----|
| ナシヒメシンクイ   | 16 |
| リンゴハマキクロバ  | 17 |
| チャバネアオカメムシ | 18 |
| ナシアブラムシ    | 19 |
| ワタアブラムシ    | 20 |
| ヒロヘリアオイラガ  | 21 |
| モンクロシャチホコ  | 22 |
| ナミハダニ      | 23 |

## 害虫 ぶどう

|             |    |
|-------------|----|
| チャノコカクモンハマキ | 24 |
| モンキクロノメイガ   | 25 |
| チャノキイロアザミウマ | 26 |
| フタテンヒメヨコバイ  | 27 |
| クワコナカイガラムシ  | 28 |



**害虫 もも・すもも・ネクタリン**

|                             |    |
|-----------------------------|----|
| モモシンクイガ                     | 29 |
| ナシヒメシンクイ                    | 30 |
| モモノゴマダラノメイガ                 | 31 |
| モモハモグリガ                     | 32 |
| カワリコブアブラムシ                  | 33 |
| モモコフキアブラムシ                  | 34 |
| ウメシロカイガラムシ                  | 35 |
| ナシマルカイガラムシ<br>(サンホーゼカイガラムシ) | 36 |
| 吸蛾類<br>アケビコノハ、アカエグリバ、ヒメエグリバ | 37 |

**害虫 おうとう**

|               |    |
|---------------|----|
| オウトウシヨウジョウバエ  | 38 |
| リンゴコカクモンハマキ   | 39 |
| オビカレハ (ウメケムシ) | 40 |

**害虫 かんぎつ**

|   |    |
|---|----|
| チャノキイロアザミウマ                             | 41 |
| ミカンハモグリガ                                | 42 |
| カメムシ類<br>チャバネアオカメムシ、ツヤアオカメムシ<br>クサギカメムシ | 43 |
| ナミアゲハ (アゲハチョウ)                          | 44 |
| ミカンハダニ                                  | 45 |
| ミカンサビダニ                                 | 46 |
| ミカンクロアブラムシ                              | 47 |



# モモシクイガ

チョウ目 シクイガ科

*Carposina niponensis*



## 【加害作物】

りんご、なし、おうとう、もも、うめ、すもも、あんずなど

## 【発生・形態・被害】

年1～2回の発生。越冬態は成熟幼虫。秋季に発生した成熟幼虫が土中に浅く潜って繭を作りその中で越冬する。寒冷地で発生が多く、成虫は5月下旬～10月上旬まで1～2回継続して発生する。この間幼虫が、りんご、ももやすももなどの果実に食入し果肉を食害するので、果実は収穫不能になる。1果に数頭の幼虫が入って食害することがある。幼虫の食入痕からヤニが出るが、虫糞はほとんど出ない。

# ナシヒメシンクイ

チョウ目 ハマキガ科

*Grapholita molesta*



成虫



1 齢幼虫



被害芽

## 【加害作物】

りんご、なし、おうとう、もも、うめ、すもも、あんずなど

## 【発生・形態・被害】

寒冷地では年2～3回、暖地では5～6回発生する。越冬態は成熟幼虫。幹や枝の間隙に繭を作りその中で越冬する。成虫は黒褐色で白い筋状の斑紋がある。早春に蛹化後羽化した成虫は、ももやうめ、さくらなどのバラ科樹木の新芽に産卵する。幼虫はそれらの新梢内に潜って食害する。これらの樹木では芯折れ症状が発生する。りんごでも新梢に食入するので新梢は枯死する。また、収穫間近の果実の果面に産卵し、孵化した幼虫は果底から果実内に食入する。果実での寄生は少ないが、寄生果実は商品価値が消失するので被害は大きい。

# リンゴコカクモンハマキ

チョウ目 ハマキガ科  
*Adoxophyes orana fasciata*



成虫(左:雌、右:雄)



幼虫(2~5齢幼虫)



被害新芽

## 【加害作物】

りんご、なし、おうとう、もも、うめ、すもも、あんずなど

## 【発生・形態・被害】

4月から10月まで年3~4回発生する。越冬態は幼虫。秋季に葉で発生した幼虫が幹の隙間や樹皮下で糸を綴り、その中で越冬する。成虫も幼虫もチャノコカクモンハマキと形態も生態も近似する。樹上で越冬した幼虫は発芽後、新芽や花蕾に移動し糸で綴って食害する。花蕾の食害は直接減収の原因になり、新芽や新葉の食害は新梢の生長に影響する。その後の世代は新芽や新葉を巻いて中から食害して発生を続ける。葉と果実が重なった部分に幼虫が潜り、果実表面を食害することがあり、なめり果となって商品性を低下させる。幼虫は非常に広食性であり、多種類の農作物の害虫になっている。

# キンモンホソガ

チョウ目 ホソガ科  
*Phyllonorycter ringoniella*



成虫



成熟幼虫(有脚幼虫)



被害葉

## 【加害作物】

りんご、ズミ、カイドウ、マルメロなど

## 【発生・形態・被害】

年4～5回の発生。4月から9月まで新芽が伸張している期間は継続して発生するが、夏から秋にかけての発生が多い。越冬態は蛹。秋に発生した幼虫が葉の中で蛹化するが、落葉後もその葉の中で越冬する。若齢幼虫は無脚で、葉裏から表皮を残して薄く広く潜行しながら汁液を吸ったり、海綿状組織をわずかに舐めながら食害する。この時期の食害痕(被害)は葉表からはわからない。成長して有脚幼虫になると海綿状組織を食害し、その付近で蛹化する。この時期の食害痕(被害)は葉表にも現われ、やがて食害痕部分は褐色に枯れる。多発生すると早期落葉や樹勢が低下し、果実肥大に影響を与える。

# ミダレカクモンハマキ

チョウ目 ハマキガ科

*Archips fuscocupreanus*



成虫(上:雌、下:雄)



ふ化中の幼虫



被害花

## 【加害作物】

りんご、なし、おうとう、もも、うめ、すもも、あんずなど

## 【発生・形態・被害】

春季に年1回発生する。越冬態は卵。初夏に羽化した成虫が、枝幹樹皮に卵塊で産卵する。それがそのまま越夏して越冬する。成虫も幼虫も形態はリンゴコカクモンハマキとやや似ているので、分類には注意する。卵塊は黒色、1齢幼虫の頭部は黒色などが本種の特徴。早春に孵化した幼虫は、発芽後の新芽や花蕾に移動し糸で綴って食害する。葉と果実が重なった部分に幼虫が潜り、果実表面を食害することがあり、なめり果となって商品性を低下させる。幼虫は広食性であり、多種類の果樹や樹木の害虫になっている。



# ギンモンハモグリガ

チョウ目 ハモグリ科

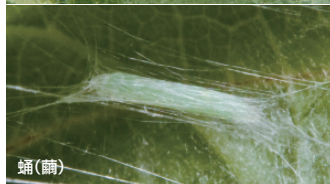
*Lyonetia prunifoliella malinella*



幼虫



越冬中の成虫



蛹(繭)



被害葉

## 【加害作物】

りんご、マルメロ、さくらなど

## 【発生・形態・被害】

主に寒冷地のりんごに年5～7回発生する。越冬態は成虫。秋に発生した成虫が、幹や枝の間隙やりんご園周辺の樹木や建造物内で越冬する。成虫は夏型は銀白色で、翅端に斑紋があるが、越冬成虫はその斑紋が多くなる。

越冬成虫は、発芽の新葉に産卵し1齢幼虫は葉肉を潜行食害するので、食害痕はハモグリバエのような絵描き状になる。2齢幼虫は葉肉の一部にとどまり、袋状あるいは斑状に葉肉を食害する。食害痕はやがて褐色になり枯れるので、多発生時は葉全体が枯れる。主に春から初夏に発生が多いが、新芽が継続して伸びる徒長枝や幼木では長期間発生する。

## ケムシ類

マイマイガ:チョウ目ドクガ科

*Lymantria dispar*

アメリカシロヒトリ:チョウ目ヒトリ科

*Hyphantria cunea*

ヒメシロモンドクガ:チョウ目ドクガ科

*Orgyia thyellina*

リンゴケンモン:チョウ目ヤガ科

*Triaena intermedia*



マイマイガ



ヒメシロモンドクガ



アメリカシロヒトリ



リンゴケンモン

**【加害作物】** りんご、さくら、なし、かき、やなぎなどの広葉樹

**【発生・形態・被害】**

体毛の長いガの幼虫をケムシ類と称し、りんごでは、マイマイガ(年1回発生)、アメリカシロヒトリ(年2回)、ナシケンモン(年2～3回)、リンゴケンモン(年2回)、モンシロドクガ(年2～4回)、ヒメシロモンドクガ(年2回)、モンクロシャチホコ(年1回)などがある。いずれも葉や花を食害するが、りんごで多発生することはあまりない。モンクロシャチホコはバラ科植物の葉のみを食害するが、その他の種はいずれも広食性。アメリカシロヒトリとモンクロシャチホコの幼虫は集合性が強いので、りんごで発生したときは、1枝の葉が全部暴食され大きな被害になる。

ナシケンモン、ヒメシロモンドクガ、モンシロドクガは刺毛によりかぶれる。

# ヨモギエダシヤク

チョウ目 シヤクガ科

*Ascotis selenaria*



1齡幼虫



成熟幼虫



成虫

## 【加害作物】

りんご、さくら、なし、茶、かきなどの広葉樹

## 【発生・形態・被害】

年3回発生し、幼虫は5～9月に見られる。越冬態は蛹。秋季に発生した成虫が土中で蛹化して越冬する。1齡幼虫の体色は淡緑色で、背面には縦の黒の条がある。2齡幼虫は全体黒褐色。3齡幼虫以降の体色は変化に富む。2齡幼虫以降、腹部背面には一対の隆起があり、本種の大きな特徴になる。成虫は、りんごや周辺樹木の樹皮の割れ目、建造物の隙間などへ卵塊で産卵する。1齡幼虫は集合することなく歩行や風で運ばれて広範囲に分散する。りんごの木に産卵された場合は、その木に多発生する。若齡幼虫は新芽のみを食害するが、中齡幼虫以降は展開葉も食害する。成熟幼虫は体長4cmほどと大きく、食害量も多いので数頭の食害で結果枝の葉が丸坊主になることがある。

# ユキヤナギアブラムシ

カメムシ目 アブラムシ科

*Aphis citricola*



成虫、幼虫のコロニー



新梢に寄生のコロニー

## 【加害作物】

りんご、おうとう、なし、かんきつ、ユキヤナギなど

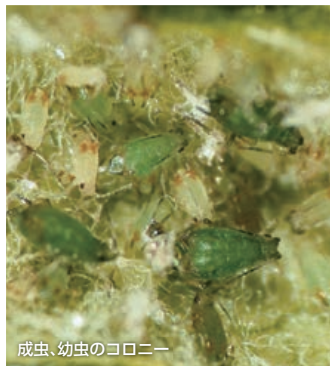
## 【発生・形態・被害】

5月から10月まで新芽や葉に継続して寄生する。越冬態は卵。秋季に葉で発生した成虫が休眠芽基部に産卵し、そのまま越冬するが、りんごでの越冬は稀である。体色は淡黄緑色でコロニー全体で安定している。角状管は黒色。非常に広食性で園周辺の植物に発生した成虫が、5月からりんごに飛来して発生が始まる。その後、新芽や葉、幼果で継続して発生する。新芽に多発生した場合、その後新葉が奇形になったりして新梢の生育が抑制される。すすも発生するので、果実では商品性を低下させる。

# リンゴコブアブラムシ

カメムシ目 アブラムシ科

*Myzus malisuctus*



成虫、幼虫のコロニー



被害葉

## 【加害作物】

りんご、ズミ、サンザシ、ボケなど

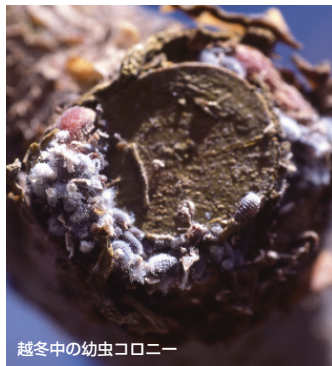
## 【発生・形態・被害】

4月から10月まで継続して発生するが、5～7月の発生が多い。越冬態は卵。秋季に発生した成虫が、りんごの休眠芽の基部に産卵した卵で越冬する。体色は頭胸部は緑色を帯びた黒褐色、腹部は暗緑色で濃淡がある。角状管は黒色。主に新葉の葉裏に寄生する。大きなコロニーになるので、葉は巻いて奇形になり新梢の生育は抑制される。多発生時には、果実にすすが発生して商品性を低下させる。

# リンゴワタムシ

カメムシ目 アブラムシ科

*Eriosoma lanigerum*



越冬中の幼虫コロニー



被害枝(虫えい)

## 【加害作物】

りんご、カイドウ、ニレなど

## 【発生・形態・被害】

5月から10月まで継続して発生する。越冬態は幼虫。秋に発生した幼虫が枝幹の隙間や根部などで集合して越冬する。幼虫も成虫も白い綿状物質で覆われてコロニー全体は白く見える。越冬幼虫は、5月から新梢の基部、選定後の切り口、根など硬化中の部分に移動して定着する。6月に成虫になるが、この時期に有翅成虫が大量に発生して移動分散する。寄生部は徐々に膨らんで虫えいになり、多発生すると樹勢は衰える。

# リンゴハダニ

ダニ目 ハダニ科

*Panonychus ulmi*



## 【加害作物】

りんご

## 【発生・形態・被害】

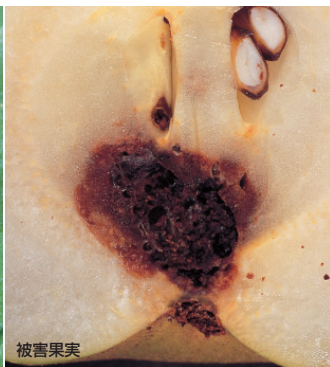
りんごには、4月の発芽後から10月の落葉前まで多種類のハダニが発生する。季節や地域、栽培型により主要種が異なる。リンゴハダニはりんごの主要種であるが、寒冷地に多い。リンゴハダニの越冬態は卵。秋に発生した成虫が小枝の各部に産卵し、そのまま越冬する。成虫の体色は赤色で、りんごに発生するカンザワハダニやオウトウハダニと似ている。

一般には7～8月に多発生する。初発生時は葉裏に多いが、葉表にも発生する。新葉での被害症状は、初発生時は葉表には多数の小白点が生じる。発生が増加すると葉色は退色したり、葉裏は全面茶褐色になる。多発生は、秋季の早期落葉の原因になる。

# ナシヒメシンクイ

チョウ目 ハマキガ科

*Grapholita molesta*



## 【加害作物】

なし、もも、うめ、すもも、あんず、おうとう、りんごなどバラ科の新梢や果実

## 【発生・形態・被害】

寒冷地では年2～3回、暖地では5～6回発生する。越冬態は成熟幼虫。幹や枝の間隙に繭を作りその中で越冬する。成虫は黒褐色で白い筋状の斑紋がある。早春に蛹化後羽化した成虫は、ももやうめ、さくらなどのバラ科樹木の新芽に産卵する。幼虫はそれらの新梢内に潜って食害する。これらの樹木では芯折れ症状が発生する。なしでは収穫間近の果実に寄生することが多い。果面に産下された卵から孵化した幼虫は、果底から果実内に食入する。このため、外部から幼虫の姿は見られない。なし園近くにさくらが多いと本種の被害は多くなる。



# リンゴハマキクロバ

チョウ目 マダラガ科

*Illiberis pruni*



成虫



2齢幼虫



被害葉

## 【加害作物】

なし、りんご

## 【発生・形態・被害】

年1回の発生。越冬態は若齢幼虫。樹皮下や割れ目などに集まって越冬する。成虫は全体黒色。成虫は6月下旬～7月中旬に羽化し、間もなく産卵する。若齢幼虫は葉を食害するがこの時期の被害は軽微である。8月上旬から樹皮下に移動してそのまま越冬する。越冬後の幼虫は、なしの新芽を食害して成長し、中齢幼虫以降は展開葉を袋状につづり中から食害をする。4～6月初めの被害が多くなる。通常の防除園では発生はないが、7月以降殺虫剤を削減すると発生が多くなる。

# チャバネアオカメムシ

カメムシ目 カメムシ科

*Plautia crossota stali*



## 【加害作物】

なし、すもも、りんごなど果実全般

## 【発生・形態・被害】

年1回、一部2回の発生。越冬態は成虫。林縁の枯葉内で、体色を枯葉色に変えて越冬する。成虫は6～7月に主にスギやヒノキのきゅう果に産卵し、幼虫はそれを吸汁して成長し、7～8月に新成虫が羽化するなしでは6月以降の幼果期から成虫の飛来が始まり、収穫完了時まで継続する。また、なし果実で幼虫が発生することもあるが、やがて死亡して成虫にはならない。幼果期の被害ほど著しく、果実はその後奇形になったり落果する。成熟期の被害は、吸汁加害部はスポンジ状になり商品性を消失する。また、吸汁加害部を中心に腐敗することもある。本種のほかに、暖地ではツヤアオカメムシ、寒冷地ではクサギカメムシが加害する。

# ナシアブラムシ

カメムシ目 アブラムシ科

*Schizaphis piricole*



## 【加害作物】

なし、もも

## 【発生・形態・被害】

春から初夏にかけて発生が多いが、新芽が伸びている期間は継続して発生する。越冬態は卵。冬芽やその周辺に産卵する。成虫も幼虫も、体全体鮮やかな緑色の大型のアブラムシ。新芽の葉表側に寄生して大きなコロニーを作る。展開中の葉にも継続して寄生を続けるので、葉は内側に巻くようになる。寄生数が多いと葉は萎縮したり奇形になる。落葉はしないが、発生期間が長期におよび、1枝の全部が葉が巻いた状態になり、正常葉はなくなるのでその後の果実の肥大に影響を与える。排泄物が多いので降雨が少ないときには、すすが発生する。

# ワタアブラムシ

カメムシ目 アブラムシ科

*Aphis gossypii*



越冬雌



越冬卵



成虫、幼虫のコロニー

## 【加害作物】

なし、かんきつ、野菜や花

## 【発生・形態・被害】

新芽が伸びている期間継続して発生するが、春から夏にかけて発生が多い。越冬態は寒冷地では卵、暖地では胎生雌。暖地の一部では冬季でも増殖する。低温期の春は、コロニーの中には緑黒色の体色が多いが、6月以降の高温期にはコロニーの中には緑色や淡黄色の個体が現れる。新芽に寄生して大きなコロニーを作るので、新葉は展開が遅れたり奇形になる。近年、発生が多くなったアブラムシである。薬剤に対して感受性が低下しているので、一部地域ではなしの主要種になっている。

# ヒロヘリアオイラガ

チョウ目 イラガ科

*Parasa lepida*



## 【加害作物】

なし、おうとう、すもも、あんずなど

## 【発生・形態・被害】

5月から10月まで年2回発生する。越冬態は成熟幼虫。秋季に葉で発生した成熟幼虫が、幹や地上の石などに繭を作りその中で越冬する。成虫は卵塊で産卵するので2齢幼虫まで集合して葉を食害する。3齢幼虫以降徐々に分散して新梢全体に広がる。食害量が多いので、新梢(徒長枝)の葉は丸坊主となりその後の生育や果実肥大に影響する。果実を食害することはない。幼虫には体表一面に刺毛があり、刺されると激しい疼痛がありかぶれる。そのため、摘果や収穫時には衛生害虫になる。また、幼虫は非常に広食性で多種類の農作物の害虫になっている。

# モンクロシャチホコ

チョウ目 シャチホコガ科

*Phalera flavescens*



## 【加害作物】

なし、おうとう、もも、りんごなどバラ科の樹木

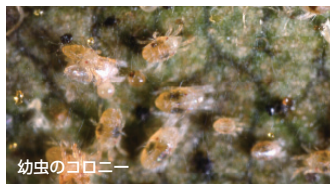
## 【発生・形態・被害】

年1回8～9月に発生する。越冬態は蛹。成熟幼虫は土中に潜り蛹化する。卵塊で産卵されるので、若齢幼虫は集合して食害する。3齢幼虫以降は徐々に分散を始めるが、成熟幼虫も1枝にまとまって寄生することが多い。若齢幼虫は赤色を帯び、成熟幼虫は黒色を帯びる。幼虫の体毛は淡黄色で長い。静止の時は頭部と尾端を上げる。幼虫を横から見ると船の形に見えるので、フナガタケムシと呼ばれている。成熟幼虫は体長が5cmほどになり食害量も多く、葉の中肋のみを残して暴食するので、多発生時には1枝丸坊主になることがある。

# ナミハダニ

ダニ目 ハダニ科

*Tetranychus urticae*



## 【加害作物】

なし、おうとう、もも、りんご、茶など

## 【発生・形態・被害】

なしでは4月の発芽後から10月の落葉前まで多種類のハダニが発生する。季節や地域、栽培型により主要種が異なる。ナミハダニの越冬態は成虫。樹皮下やなし園の小草などで休眠状態で越冬する。6月から7月に掛けて急増する。8月には一時減少するが9月から再び増加する。新葉での被害症状は、初発生時は葉表には多数の小白点が生じ、さらに発生が多くなると葉色は退色し、奇形葉になることもある。展葉後の硬化した葉では葉表には白斑は現れないが、多発生時には全体退色し葉裏は茶褐色になる。梅雨明けから盛夏時に多発生すると、高温と直射により葉焼けになり果実の肥大や品質に影響する。秋の多発生は早期落葉の原因になる。

# チャノコカクモンハマキ

チョウ目 ハマキガ科

*Adoxophyes honmai*



成虫(上:雌、下:雄)



幼虫と被害果実

## 【加害作物】

ぶどう、なし、かんきつ、かき、茶など

## 【発生・形態・被害】

4月から10月まで年4回発生する。ぶどうでは秋季に葉で多発生することはないので、ぶどう園で越冬する個体はほとんどない。周辺の常緑樹の葉で、秋季に発生した幼虫がそのまま巻葉の中で越冬する。広食性であり多種類の農作物の害虫になっている。ぶどうでは着蕾期から収穫前まで花穂や果房に発生し、被害を与える。花穂の食害は、その後果実のつきが不揃いになる。果房の食害は、果実が萎ちようしたり腐敗する。



# モンキクロノメイガ

チョウ目 メイガ科  
*Herpetogramma luctuosalis*



幼虫



被害葉

## 【加害作物】

ぶどう

## 【発生・形態・被害】

6月から10月まで2~3回発生するが、夏季以降に被害が多くなる。幼虫は秋季巻葉の中や外に出て、成熟幼虫で越冬する。幼虫は葉を大きく巻いて中から食害する。巻葉の中に大量の虫糞をためる。施設栽培で発生が多い。多発生時には巻葉が多くなり生育に影響を与える。エビヅル、ノブドウ、ヤブガラシで発生が多い。

# チャノキイロアザミウマ

アザミウマ目 アザミウマ科

*Scirtothrips dorsalis*



成虫



幼虫



被害果実

## 【加害作物】

ぶどう、なし、かんきつ、かき、茶など

## 【発生・形態・被害】

4月から11月まで継続して発生する。越冬態は成虫。秋季発生した、成虫が地表面の落葉やゴミなどの下で越冬する。広食性であり多種類の農作物の害虫になっている。ぶどうでは着蕾から着色前まで花穂や果房に発生し、果梗枝や果実の表面を食害する。食害された果梗は褐変する。食害された果実は、果表面が硬化した不規則な斑紋状の被害症状となる。

# フタテンヒメヨコバイ

カメムシ目 ヒメヨコバイ科

*Arboridia apicalis*



成虫



幼虫



被害葉

## 【加害作物】

ぶどう

## 【発生・形態・被害】

年3回発生するので、ぶどうの葉のある期間中は、いずれかの発育態が見られる。施設栽培では年4回発生することもある。越冬態は成虫。秋季発生した成虫は、落葉や雑草の中、樹皮下などで越冬する。成虫も幼虫も葉裏から吸汁加害する。新芽より展開間もない葉から発生を初め、葉が硬化しても継続して発生する。吸汁箇所は、葉表に小さな白斑が生じる。多発生時には葉全面が白化したり、一部は枯死する。多発生が継続すると、その後の新芽の成長や果実の肥大に影響を与える。

# クワコナカイガラムシ

カメムシ目 コナカイガラムシ科

*Pseudococcus comstocki*



成虫



被害果実

## 【加害作物】

ぶどう、りんご、なし、かんきつなど

## 【発生・形態・被害】

寒冷地では年2回、暖地では年3回発生する。越冬態は卵。秋に発生した雌成虫の卵のう内で越冬する。越冬卵は4月下旬から孵化を始める。本種は、新梢や葉柄の基部、葉裏、果房内などに直射日光が当たらない、暗い場所に好んで寄生する。また、このような場所は薬剤がかかりにくいので、ひとたび発生が始まると長年発生が続く。排泄物を多量に出すので、すすが発生する。果梗枝に寄生すると果実にすすが発生し、商品性を著しく低下させる。

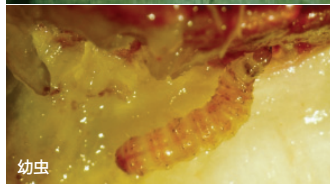
# モモシンクイガ

チョウ目 シンクイガ科

*Carposina niponensis*



成虫



幼虫



被害果実

## 【加害作物】

もも、なし、りんご、すもも、おうとう、うめ、あんずなど

## 【発生・形態・被害】

年1～2回の発生。越冬態は成熟幼虫。秋季に発生した成熟幼虫が土中に浅く潜って繭を作りその中で越冬する。寒冷地で発生する。成虫は5月下旬～10月上旬まで1～2回継続して発生する。この間幼虫が、ももやすもも、りんごなどの果実に食入し果肉を食害するので、果実は収穫不能になる。1果に数頭の幼虫が入って食害することがある。幼虫の食入痕からヤニが出るが、虫糞はほとんど出ない。

# ナシヒメシンクイ

チョウ目 ハマキガ科

*Grapholita molesta*



蛹



幼虫



被害新梢

## 【加害作物】

もも、なし、おうとう、うめ、すもも、あんず、りんごなどバラ科の新梢や果実

## 【発生・形態・被害】

寒冷地では年2～3回、暖地では5～6回発生する。成虫は4～10月まで発生する。越冬態は成熟幼虫。幹や枝の間隙に繭を作りその中で越冬する。成虫は黒褐色で白い筋状の斑紋がある。早春に蛹化後羽化した成虫は、新芽に産卵する。幼虫は新梢内に潜って食害するので、新梢は食害部から萎れて折れる芯折れ症状が発生し、生育が停止する。その後引き続き新芽に寄生する。また、幼果時から収穫直前まで果肉を食害して、萎縮や腐敗させる。

# モモノゴマダラノメイガ

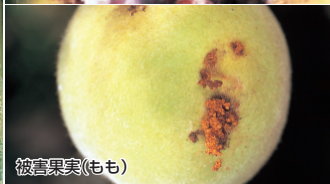
チョウ目 ツトガ科  
*Conogethes punctiferalis*



成虫



幼虫



被害果実(もも)

## 【加害作物】

もも、なし、すもも、うめ、かき、くり

## 【発生・形態・被害】

もも果実の主要種。年3回発生する。成虫は5～10月まで発生する。越冬態は成熟幼虫。かきやくりで秋季に発生した成熟幼虫が、幹や枝の間隙に繭を作り、その中で越冬する。成虫は鮮やかな黄色で黒い小斑紋が散在する。成熟幼虫は橙赤色で、背部に明瞭な板状の斑紋がある。春に蛹化後羽化した成虫は、肥大開始したももの他、なし、すもも、うめなどの果実に産卵し、幼虫は果実のみを食害して育成する。8月まではこれらの果実で発生するが、9月以降は柿や栗の果実で発生する。幼虫は食害量が多いので、果肉全体を暴食する。虫糞を果実外に大量に出し糸でつづり合わせる。

# モモハモグリガ

チョウ目 ハモグリガ科

*Lyonetia clerkella*



越冬中の成虫



幼虫の食害痕



被害葉

## 【加害作物】

もも、なし、すもも、うめ、かき、くり

## 【発生・形態・被害】

年5～7回発生する。成虫は4～10月まで継続して見られる。越冬態は成虫。秋季に発生した成虫が、幹や枝の間隙や建造物などの中で越冬する。初夏から秋に発生する成虫は、前翅前縁部の斑紋を除いて全体が白色であるが、晩秋に発生する越冬成虫は全体が黒化する。越冬した成虫は春期展開した葉に産卵し、幼虫は葉肉を潜行して食害して成育する。成熟幼虫は葉の外に出てハンモック状の白い繭を作って蛹化する。食害痕は線状の絵描き症状になって現れ、後に食害痕の一部は穴があく。被害葉は早期に落葉する傾向が強い。そのため、多発生した場合、全葉が落葉することもある。



# カワリコブアブラムシ

カメムシ目 アブラムシ科

*Myzus varians*



## 【加害作物】

もも、すもも、センニンソウ、ボタンヅル

## 【発生・形態・被害】

4～6月に発生する。夏季はセンニンソウやボタンヅルで発生する。越冬態は卵。夏季にセンニンソウなどで発生した有翅成虫がももに飛来し、芽の付近に産卵した卵で越冬する。春季ももで発生した個体は、淡黄緑色が多いが、暗黒色の個体もある。角状管は黒色、触角も1節ごとに黒色。春季、新芽に寄生するが、展葉する葉裏で長期に寄生して増殖を続け大きなコロニーを作る。被害症状は葉を内側に巻き縦長になることが多い。被害は新梢全体に及ぶことがある。夏季はセンニンソウなどで発生するが、ももで発生した個体とは体色や形態が異なる。

# モモコフキアブラムシ

カメムシ目 アブラムシ科

*Hyalopterus pruni*



成虫、幼虫のコロニー



被害新梢

## 【加害作物】

もも、すもも、あんず、うめ、ヨシ

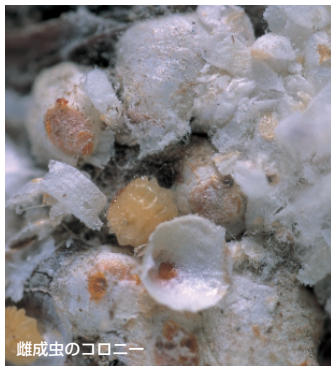
## 【発生・形態・被害】

4～6月に発生する。夏季以降はヨシなどのイネ科植物で発生する。越冬態は卵。夏季以降にイネ科植物で発生した有翅成虫が、秋季にももに飛来し芽付近に産卵した卵で越冬する。ももで発生した個体は、体色は黄緑色から緑色であるが、体全体大量の白色粉で覆われている。春季、展葉中の葉裏で中肋に沿って寄生を始めるが、成葉でも寄生するので長期にわたって発生が続き、葉裏全体に大きなコロニーを作る。被害症状は葉が萎縮したり奇形になったりする。被害は新梢全体に及び先端から枯れることもある。また、排泄物により果実にすすが発生し、商品性を消失させる。

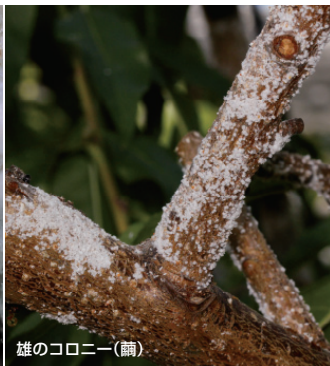
# ウメシロカイガラムシ

カメムシ目 マルカイガラムシ科

*Pseudaulacaspis prunicola*



雌成虫のコロニー



雄のコロニー(繭)

## 【加害作物】

もも、うめ、すもも、あんず、バラなど

## 【発生・形態・被害】

年3回の発生で、1齢幼虫は5月上旬から、7月上旬から、8月上旬から発生する。一部9月下旬から4回目の幼虫が発生する年もある。越冬態は雌成虫。秋季に発生した成虫が、枝や幹に寄生して越冬する。雄幼虫は2齢幼虫で成熟して繭を作って蛹化するが、集合する性質が非常に強く、多発生時には枝が繭で覆われ真っ白に見える。雌成虫は、円形の貝殻で覆われている。本来は白い貝殻であるが、枝の割れ目、基部などに寄生することが多いことや、貝殻の表面は汚れているので見つけにくく、初発生の発見が遅れる。雌成虫が多発生すると寄生された枝は生長を阻害されたり、早期落葉したり枝が枯死することもある。

# ナシマルカイガラムシ(サンホーゼカイガラムシ)

カメムシ目 マルカイガラムシ科

*Comstockaspis perniciososa*



雌成虫のコロニー



被害新梢

## 【加害作物】

もも、うめ、すもも、あんず、なしなど

## 【発生・形態・被害】

年3回の発生。越冬態は1齢幼虫。秋季に雌成虫が産卵し1齢幼虫が発生する。その1齢幼虫は雌の介殻の下で越冬する。未産卵の雌成虫は越冬しても翌春産卵せず死亡する。丸くやや小さいカイガラムシで、介殻の色は淡褐色を帯びる。春の発芽後から枝や幹で越冬していた、1齢幼虫が新梢に移動して定着する。定着後は移動しない。幼虫や成虫が吸汁加害することにより樹勢が低下したり、多発生時には枝は枯れる。また、果実にも発生するので商品性を低下させる。非常に広食性であるが、ももではウメシロカイガラムシの発生が多く、本種が多発生することは少ない。

## 吸蛾類

チョウ目 ヤガ科

アケビコノハ *Adris tyrannus*

アカエグリバ *Oraesia excavata*

ヒメエグリバ *Oraesia emarginata*



アケビコノハ



アカエグリバ



ヒメエグリバ

### 【加害作物】

もも、なし、かき、かんきつなどの果実

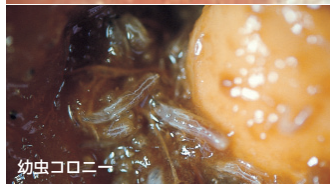
### 【発生・形態・被害】

アケビコノハ、アカエグリバは年4回の発生で成虫越冬、ヒメエグリバは年4回の発生で成熟幼虫越冬。ももでは6月から9月まで、この間に成熟する果実で被害が発生する。春から晩秋まで、成虫が成熟期の果実を吸汁加害する蛾類を吸蛾類と呼ぶ。健全な果実を吸汁加害する種を一次加害種、傷果や腐敗中の果実を吸汁加害する種を二次加害種と呼ぶ。一次加害種の主要種は、アケビコノハ(食草はアケビ、カミエビなど)、アカエグリバ(食草はカミエビ)、ヒメエグリバ(食草はカミエビ)などが上げられる。いずれの種も果樹園周辺の雑草で発生した成虫が飛来して被害を与える。有袋栽培でも袋の上から吸汁されることもある。被害果実はその後腐敗し収穫不能になる。

# オウトウショウジョウバエ

ハエ目 ショウジョウバエ科

*Drosophila suzukii*



## 【加害作物】

おうとう、もも、うめ、すもも、あんずなど

## 【発生・形態・被害】

年10数回発生すると推察されるが、おうとうでは6～7月に2～3回発生する。越冬態は成虫。秋に発生した成虫が落葉の間などで越冬する。春以降、野外の色々な果実で発生した成虫がおうとうの完熟直前に飛来し、果皮に産卵管で穴を開けて産卵する。幼虫は果肉を食害するので腐敗し収穫不能になったり、収穫後に幼虫が果実内に発生し問題になることもある。本種は第1次加害種であるが、本種により傷果や発酵・腐敗した果実には、他のショウジョウバエも発生する(第2次加害種)ので被害は急速に進むことがある。おうとう園の早生種に成虫が飛来後は、園内の果実で継続して発生するので晩生種ほど被害は多くなる。

# リンゴコカクモンハマキ

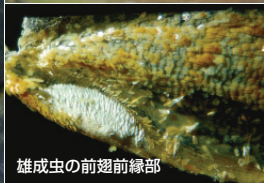
チョウ目 ハマキガ科  
*Adoxophyes orana fasciata*



成虫(左:雄、右:雌)



新芽中の幼虫



雄成虫の前翅前縁部

## 【加害作物】

おうとう、もも、うめ、すもも、あんず、りんご、なしなど

## 【発生・形態・被害】

4月から10月まで年3～4回発生する。越冬態は幼虫。秋季に葉で発生した幼虫が幹の隙間や樹皮下で糸を綴り、その中で越冬する。チャノコカクモンハマキと形態も生態も近似する。雄成虫の前翅前縁には折り返しがあり、それをめくると本種では白い縞状模様があることが特徴。樹上で越冬した幼虫は発芽後、新芽や花蕾に移動し糸で綴って食害する。その後の世代は新芽や新葉を巻いて中から食害して発生を続ける。果実の加害は少ない。花蕾の食害は直接減収の原因になり、新芽や新葉の食害は新梢の生長に影響する。幼虫は非常に広食性であり、多種類の農作物の害虫になっている。

# オビカレハ(ウメケムシ)

チョウ目 カレハガ科

*Malacosoma neustria*



成虫



若齢幼虫のコロニー



成熟幼虫と被害新梢

## 【加害作物】

おうとう、もも、うめ、すもも、あんずなど

## 【発生・形態・被害】

年1回の発生。越冬態は卵。夏に羽化した成虫は、細い枝に卵塊で産卵する。卵はそのまま越夏し越冬する。1齢幼虫は早春に発生し、新芽や花蕾の食害を始める。幼虫は4齢幼虫期まで集合する性質が強く、この間、食害の時以外は多量の糸を吐いて作った膜状の巣の上に集合する。幼虫はその巣を基点に集団で移動し、新芽、花蕾、新葉を次々と食害するので枝単位で葉は丸坊主の被害になる。



# チャノキイロアザミウマ

アザミウマ目 アザミウマ科

*Scirtothrips dorsalis*



成虫



幼虫



被害果実

## 【加害作物】

かんきつ、ぶどう、なし、かき、茶など

## 【発生・形態・被害】

4月から11月まで継続して発生する。越冬態は成虫または蛹。秋季発生した成虫が地表面の落葉やゴミなどの下で越冬する。かんきつでは果実を加害するので、果実には5月(幼果期)から9月(着色前)まで継続して見られる。主に圃場周辺で発生した成虫が飛来して果実の表面を加害する。果実の発育により加害場所が異なり被害症状も異なる。5月下旬から7月中旬はガクの下部を加害され、果実の肥大に伴い灰白色のリング状の傷が生じる。7月中旬以降は果頂部を加害され、果頂部には面的に大きな灰白色の雲形状斑が生じる。9月中旬以降は果頂部を加害され、面的に暗褐色の小さな小斑点が生じる。いずれの被害も果実の肥大や品質には影響を与えないが、美観を消失する。

# ミカンハモグリガ

チョウ目 コハモグリ科

*Phyllocnistis citrella*



成虫



幼虫と食害痕



被害葉

## 【加害作物】

かんきつ

## 【発生・形態・被害】

4月から10月まで継続して発生する。越冬態は成虫。秋に発生した成虫が落葉内などで越冬。新芽に産卵するので、春枝のみが伸びる結果樹では春枝の被害に限られるが、春、夏、秋に新梢が伸びる幼木は被害が大きい。幼虫は葉の表皮と葉肉の間を潜行し、海綿状組織から出た汁液を摂取して成長する。幼虫は稀に果実にも寄生するが、蛹化できずに死亡する。加害された葉は奇形になったり萎縮するので、その後の新梢の生育に大きな影響を与える。落葉はしない。

# カメムシ類

カメムシ目 カメムシ科  
 チャバネアオカメムシ *Plautia stali*  
 ツヤアオカメムシ *Glaucias subpunctatus*  
 クサギカメムシ *Halyomorpha mista*



チャバネアオカメムシ



クサギカメムシ



ツヤアオカメムシ

## 【加害作物】

多くの果実類

## 【発生・形態・被害】

成虫は4月から10月まで継続して見られるが、幼虫の発生は6～8月にかけて年1回、一部2回。越冬態は成虫。チャバネアオカメムシは落葉内、ツヤアオカメムシは常緑樹の葉裏、クサギカメムシは樹皮下や建造物の中など、種類により異なる。チャバネは全国的、ツヤアオは暖地、クサギは寒冷地や山間部と、地域により主要種は異なる。かんきつでは開花期から収穫期まで成虫が飛来して果実を加害する。開花時や幼果期に加害されると落果する。肥大期に加害されると落果したり奇形果となる。着色期以降の加害は果肉がスポンジ状になったり、その部分から腐りが生じることがある。

# ナミアゲハ(アゲハチョウ)

チョウ目 アゲハ科

*Papilio xuthus*



## 【加害作物】

かんきつ、サンショウ

## 【発生・形態・被害】

年3～5回発生する。越冬態は蛹。秋季に発生した幼虫が蛹化しそのまま越冬する。1～4齢幼虫の体色は茶褐色で鳥の糞に似た保護色であるが、5齢幼虫は緑色になり大きな眼状紋が現れる。成虫は新芽に産卵することが多いので、5～6月の発生が多い。幼木は春芽、夏芽、秋芽と連続して新芽が伸びるので連続して多発生となる。成熟幼虫は体長が5cmほどになり食害量も多いため、数頭で結果枝が丸坊主になることもある。かんきつ類には、本種のほかに数種類のアゲハチョウが発生し、各地により優占種が異なる。いずれの種の幼虫も、形態や発生期、被害症状はよく似ている。

# ミカンハダニ

ダニ目 ハダニ科

*Panonychus citri*



卵～成虫のコロニー



被害葉

## 【加害作物】

かんきつ、なし、ももなど

## 【発生・形態・被害】

かんきつでは年間を通じて葉で見られる。6～7月に急増するが8月以降は減少する。10～11月に再び増加する。越冬態は雌成虫。秋季に発生した成虫が葉で越冬する。体色は暗赤色。葉表と葉裏に寄生するが、秋季は多発生すると果実にも発生する。葉の被害症状は、少発生時は小さい白斑が部分的に生じるが、その後の発生に伴い全面に拡大する。多発生になると葉全体が退色して黄変したり、部分的に枯れることもある。果実の被害は、果面が退色して黄色くなり艶も消失して商品性が低下する。

# ミカンサビダニ

ダニ目 フシダニ科

*Aculops pelekassi*



## 【加害作物】

かんきつ

## 【発生・形態・被害】

かんきつでは、年間を通じて葉で見られる。7月までは新芽や葉での発生が多いが、7月以降は果実での発生が多くなる。越冬態は成虫。秋に発生した成虫が葉で越冬する。体長は約1.6mmと小さく、肉眼で見極めることが難しいので初期発生を見逃すことが多い。新芽に寄生すると暗褐色になり、奇形になったり萎縮する。時に落葉する。果実に寄生すると油胞がつぶれ、果皮は灰褐色から茶褐色になりサメ肌状になる。

# ミカンクロアブラムシ

カメムシ目 アブラムシ科

*Toxoptera citricidus*



ミカンクロアブラムシ



ワタアブラムシ

## 【加害作物】

かんきつ

## 【発生・形態・被害】

かんきつに寄生する主要なアブラムシ。新芽や新梢に寄生する。春の発生は5月の開花終了後から多くなり、秋芽の生長が停止する10月以降は減少する。越冬態は雌成虫。秋に発生した雌成虫が葉で越冬する。成虫は光沢のある黒色で、幼虫は淡茶色で体色は一定。ワタアブラムシは体色が黒色であるが、コロニーの中に濃緑色や黄緑との個体も見られ、体色の変異が大きく光沢は鈍い。寄生された新芽は、展葉後に反っくり返るなど奇形葉になり生育に影響を与える。

無断転載を禁ず

ご使用にあたっては、製品ラベルをよく読み、適切に使いましょう。

**エフエムシー・ケミカルズ株式会社**